

経営情報学会 2022 年全国研究発表大会

向 正道（むかい まさみち）
開志専門職大学事業創造学部

1. はじめに

「VUCA時代のアントレプレナーシップ」, 2022年全国研究発表大会は、「VUCA (Volatility・Uncertainty・Complexity・Ambiguity)」と「アントレプレナーシップ」をテーマに大会を開催いたしました。

2022年は、社会、経済、政治において、様々な困難と目まぐるしい変化がありました。これまで以上に不確実な時代の訪れとも言えます。コロナ禍だけでなく、ウクライナ問題、世界的なインフレ等、まさにVUCAが現実となった時代と言えます。

一方、技術の変化もめまぐるしいものがありました。クラウド、AI、モバイル、IoT等、時代を代表する技術が社会やビジネスの現場を大きく変えていきました。例えば、テレワークを中心とした働き方の変化のように、デジタル技術が企業や社会へ浸透していくことで、様々な制約が取り除かれていくことを期待できます。また、政府だけでなく、多くの企業経営者が、DX(デジタル・トランスフォーメーション)に挑戦しており、様々なところでその成果が見られるようになってきました。

このように、変化の激しい時代は、企業、社会にとって脅威であると同時に、新たな取り組みを起こす機会ともとらえることができます。また、都心一極集中から地域へ、様々な形での起業や新しいビジネスの展開が注目を集めるようになりました。時代が求めるのは、新たな時代を切り開くアントレプレナーの存在であると考えます。

2. 大会実施にあたり

本大会は、当初からハイブリッドでの開催を目指しました。そのため、開催地である新潟をどのようにアピールするかが企画・運営上のポイントとなりました。

幸いにも、開催校である開志専門職大学は、新たな専門職大学制度のもと新設大学として船出したばかりということもあり、学長、副学長、大学事務局、また姉妹校である事業創造大学院大学からも多大な協力を得ることができました。

開催校イベントとして、「アントレプレナーシップ 新潟からの発信」としてパネルディスカッションを開催できただけでなく、大掛かりな懇親会を実施しない代わりに、現地にきていただけた方へのおもてなしとして「新潟の名産 試飲・試食会」を開催いたしました。

結果として、対面参加者がオンライン参加者を大きく上回り、久しぶりに活気ある大会となりました。

3. 大会の概要

開催日	: 2022年11月12日, 13日
大会参加者	: 194名 (現地参加128名)
研究発表	: 94件
一般発表	: 38件
学生発表	: 26件
ポスター発表	: 17件
支部・研究部会	: 13件



現地での研究発表の様子

4. 大会一日目

(1) 学生発表

一日目午前に3セッション、午後に2セッションの合計5セッション、26件の発表がありました。

学生優秀発表賞は下記3組となり、当日午後に発表を行いました。

■学生優秀発表賞（名前は発表者のみ）

曾我悠加他（静岡大学）「養豚における産歴に基づく淘汰基準の設定と繁殖成績の比較」

立石凌他（東京工科大学大学院）「分散型IDとポリエージェントによるWeb3環境構築」

大木伊織他（青山学院大学）「商船搭載機器の外れ値検出モデルに対するSHAPを用いた要因推定」

(2) ポスター発表

一日目午前に3セッション実施しました。17件の発表がありました。今回ハイブリッドという関係もあり、発表・質疑の時間を区切って実施いたしました。質疑や意見交換が続く場合は、別室、もしくは意見交換用のZoomブレイクアウトルームを設けて対応しました。現地発表を中心に、活発な質疑がなされました。

(3) 一般発表／支部・研究部会セッション

一日目午後に3セッション、9件の研究発表を実施いたしました。（起業・事業開発、イノベーション、IoT、経営戦略、ビジネスモデル、政府・自治体）

合わせて、二つの研究部会セッションがありました。

- ・中小企業のIT経営研究部会
- ・地方創生とデジタルビジネス研究部会

(4) 開会式

田名部元成経営情報学会会長、三上喜貴大会委員長より開会のあいさつをいただきました。

(5) 基調講演1

hakkai株式会社 代表取締役社長 関聡彦様より、『地方の中小製造業に生きる起業家精神』と題

してご講演いただきました。

■ご講演の概要

「VUCAの本質として“予測が困難な状況”があり、経営の難易度が上がっている。このような状況下で、PDCAでいうPLANに時間をかけすぎるとはむしろ危険。いかに短い時間で状況を分析し、必要なアクションを判断し実行するかがより重要である」と述べられました。また、「“アントレプレナーシップ in Growing Business”において、予測できない状況での決断では、“Flexibility（柔軟性）”と“Persistence（しつこさ）”と相反する2つの顔を持ち、状況に応じてどちらかの顔を選ぶことが求められる。粘るときには粘るが、あっさり手を引くことも必要」とのことでした。また、「地方は低成長という見方は間違っており、フォルクスワーゲンのような巨大なグローバル企業も地域の小さな町から出発している」と述べられました。



関様ご講演の様子

(6) 開催校イベント：パネルディスカッション（事業創造大学院大学共催）

「アントレプレナーシップ 新潟からの発信」というテーマで、新潟県で起業等に関わる方にご登壇いただき、いくつかのトピックスについて意見を伺いました。

登壇者：

hakkai株式会社 代表取締役社長 関聡彦様
一般社団法人 新潟県起業支援センター（CLIP 長岡）代表理事 高橋 秀明 様
新潟県産業労働部 創業・イノベーション推進課 創業支援班 佐々木 淑貴 様
事業創造大学院大学 杉本 等 教授

開志専門職大学 三上 喜貴 教授
司会：浅野 浩美（事業創造大学院大学）

■パネルディスカッションの概要

新潟県では、県、民間団体が協力して、起業家の支援を行っていること、また、具体的な取り組み例についてご紹介いただきました。特に、新潟県は起業家に向けた施策も充実しており、今後のマッチングを含めた展開が望まれるだけでなく、県内で雇用を生み出すことの重要性も述べられました。



パネルディスカッションの様子

(7) 開催校イベント：新潟の名産 試飲・試食会

開催校である開志専門職大学からのおもてなしとして、試飲・試食会を実施しました。また、北畑隆生学長から参加者の皆様へ挨拶の言葉をいただきました。

ささやかな会ではありましたが、久しぶりに、参加者の皆様の交友の場を持つことができました。

5. 大会二日目

(1) 一般発表／支部・研究部会セッション

二日目は午前4セッション、午後4セッション、合計29件の研究発表がありました。（教育・学習、人材・能力開発、組織、経営戦略、企業・事業開発、マーケティング、データマイニング、イノベーション、情報システム、情報化社会、フィンテック、業務・企業評価）

合わせて、支部、および研究部会セッションがありました。

- ・東海支部セッション
- ・IT 資産価値研究部会

(2) 基調講演2

早稲田大学ビジネススクール 根来龍之 教授より、『プラットフォーム戦略論：日本から発信する独自理論』と題してご講演いただきました。

■ご講演の概要

経営学分野において海外で評価される研究発信が少ないこと、また、日本特有の現象を説明してもインパクトが弱いことから、海外でも観察できる現象を一般化しつつ研究を進める必要があることが述べられました。また根来教授が注目するプラットフォーム理論について、その歴史を振り返り、最新のプラットフォーム研究内容、また根来教授が注目している「プラットフォームの3分類と相互作用論のモデル」について紹介がありました。



根来教授ご講演の様子

6. おわりに

「今回の全国研究発表大会はよかった」と何名もの方からお声がけいただきました。ただ、大会運営サイドの力だけでは皆様満足する大会とすることは難しかったと認識しております。関社長、根来教授含めパネル登壇者の皆様、また参加者の皆様からのご協力をいただけたことで、このような大会を開催できたと考えております。

まず、様々な制約のある中、多くの方が会場に集まってくれたことに感謝いたします。久しぶりに対面でディスカッションができたことが参加者の満足につながったと考えます。もちろん、コロナ禍の中、オンラインに切り替えられた方もいらっしゃいましたが、想定以上の参加者に新潟まで足を運ん

でいただいたこと、まことに感謝しております。

一方で、オンラインを併用した大会運営が一般的となるにも関わらず、慣れないハイブリッドでの大会運営となり、参加者の皆様にご迷惑おかけする場面もあったと認識しております。その中、トラブルがあったときは、会場の皆様が協力して対応いただいたこと、重ねて感謝申し上げます。

みなさまのご協力もあり、わずかではございますが、経営情報学会の発展に寄与できたのではないかと考えております。

謝辞

本全国研究発表大会では、開志専門職大学学長、副学長のみならず、大学事務局長、事務局職員のみなさまに多大な協力をいただきました。特に開催校イベントのパネルディスカッション、および試飲・試食会は大学事務局のご協力があったの賜物です。記してお礼申し上げます。